

仏教の視点から見た幸福と生活の質

サウワラク・キティプラパス¹⁾

ランシット大学経済学部経済・ビジネス改革研究所所長
幸福社会のための国際研究連合 (IRAH) 所長

訳：高瀬 武典

経済・政治研究所長
関西大学社会学部教授

世界の発展は経済的な生活水準を向上させたものの、その間に環境や、あるいは社会的そして人間について多くの面で深刻な問題を経験してきた。そのため、発展を全体的に考えて、発展に関する別の捉え方についての議論や、人間の福祉 (well-being) に関する問いかけがなされるようになった。幸福が発展の目標として考えられるようになってきたし、経済発展は、人間や社会や環境についてのそれ以外の側面をも必要とするこの目標を達成するためのひとつの手段として見られるべきである。しかし、幸福という概念は文化や社会の違いによって使い方が異なり、発展や生活の質にとって異なる含意へと導くようになる。仏教の観点からの幸福は西洋文化や、一般的な幸福研究で用いられているものとは異なるかもしれない。幸福概念の違いは生活の質や発展の本質についての概念の違いに関連する。そこで本稿では東洋の仏教の観点における幸福と、それが生活の質や発展に含意することを説明する。

I. 仏教における幸福の分類

仏教における幸福のランクづけは最も下の、物に基づいた幸福、つまり獲得や感覚的な喜びを満たすような幸福から始まり、さらに獲得しないことによって得られて精神と智慧に基づく内的な幸福へと上がっていき、最高レベルの、真実の幸福と考えられる、苦が完全に消滅した最高レベルの幸福にいたる。以下の3種類の幸福は仏教の幸福の概念に応じて単純に概念化し

1) Dr. Sauwalak Kittiprapas, Director of and International Research Associates for Happy Societies (IRAH) and currently Director of Economic and Business Research Center for Reforms (Faculty of Economics, Rangsit University, Thailand). This paper is based on a full research paper to the World Buddhist University (WBU). Comments are welcome to skittiprapas@gmail.com

たものである²⁾。

1. 物質 (physical) レベルからの幸福

これは物質的・必要あるいは感覚的な喜びに合うことから生まれる最も低いランクの幸福である。これは外的諸要因に依存する。したがって、それは不安定で持続可能ではない。西洋の理論におけるほとんどの幸福はこのタイプの幸福に関係している。この幸福は一時的でありうるし、適応あるいは社会的比較の理論によって説明できる。

仏教的な経済学では、肉体的物質的なレベルの幸福は人々を肉体的な苦から救済し、貧困から抜け出るための基本的な必要に関して必要とされるものである。しかし人類は必要以上の水準まで物質や資源を要求するかもしれない。肉体的レベルの人間の欲望は2つのタイプに分類できる。1) 生活の質を向上させるために真に必要とされる基本的必要 (真の必要) と、2) 必要ではなく、あるいは贅沢以上の無限の欲望である。仏教の経済学によれば、2つの欲望のどちらかを選ぶのに迷いが生じたとき、人々は真の生活の質を向上させるために第一のタイプのほうに向うべきである。第二のタイプの欲望は、自身だけでなく、社会や環境にも問題を発生させる。

貪欲によって過剰に物質を蓄えても幸福が増すとはかぎらないし、持続可能でもないばかりか、問題が生じる。人間の必要に応じた外的な喜びに依存する幸福もまたそれらを必要とする他者との争いをひきおこすかもしれない。人々はものへの依存や社会的な比較によってストレスや緊張を生じることがあるし、彼らの幸福はもっと強い欲望や圧力によってかすんでしまうこともある。それによってかわりに苦しみが増す。東洋の仏教の哲学はこの種の幸福は智慧によって管理されなければ刹那的なものにとどまり、苦しみの混合になると説明される。

このように、肉体的レベルの幸福はそれが良心と智慧によって監視される場合には受け入れられ、人間の開発をすすめるために用いられるべきである。基礎的な必要が満たされた後には、人間はもっと高いレベルの幸福、あるいは内的な幸福を得るためにさらに発展できるようになるべきである。

2. 精神の発展からうまれる幸福

このレベルの幸福は個人の自身の精神の内側で生みだせる内的な幸福の出発点である。自分の利益のための蓄えからくる幸福のかわりに、他者に与えあるいは他者と共有するだけでなく、平和で目配りのきく親切と思いやりなどのすぐれた質の精神から幸福になることができる。この精神的なレベルの幸福は彼ら自身への物質的な獲得ではなく、内的な精神から生じうる。

2) 以下の幸福についての分類と説明は Payutto, P.A. (2011), Payutto, P.A. (2012) and P.A. Payutto, (P.A. (1992) を解釈あるいは抽出したものである。

この精神にもとづく幸福はまた、善い欲求によって強められることがある。たとえば、他者の役に立とうとする欲求（自分のためでなく）であったり、（報酬のためではなく）結果だけのために働く幸福であるとか、学び自分を発展させることへの愛等々である。これは第一のレベルよりもさらに高度の幸福である。というのは、それは個人の利益のみに動かされるのではなく、もっと発展し、訓練を経ているからである。人々は善くあるために、そして聡明で創造的で有用でひとびとを苦しみから救い、善行をおこなう等々のために善意や希望をもつことができる。このように、この種の幸福は社会的な発展と幸福に役立つ。

この種の精神的発展は純粹化された、寡黙で、清澄な精神によって特徴づけることができる。瞑想だけでなく、実証心理学でもこの精神にもとづく幸福をもつように訓練することができる。精神が高い質をもったより高いレベルに発展するとき、それはいっそう智慧の道に近づく。それは、感覚的な喜びや物質のレベルの幸福を探し求めるときでさえ、それは社会により多くの平和と幸福をもたらすよりよい方向に向くだろう（つまり、自分自身に向けてではなく、自分を無にし、他者に役立つ方向を向くということである）。人間はさらに高いレベルの人間の発展を反映するこのタイプの幸福に達するために修行すべきである。

しかし、このレベルの幸福あるいは善い精神は期待や、善への執着の苦しみにかかわることがある。それゆえ、人間はこの幸福レベルから、さらに高い、苦から完全に解放されたレベルへと移るよう促される。

3. 洞察そして解放から生まれる幸福

このレベルの幸福は最高の内的幸福であり、自然の真実、つまり自然の変化の因果の相互関係の完全な理解をとまなう智慧や洞察によって特徴づけられる。内的幸福を発展させてこのレベルに到達することによって、ひとは真の幸福に達することができる。

自然の相互依存やはかなさの自然法則、そして苦の状態、また非存在（あるいは無我）の理解にとまなない、ひとは純粹化された精神をもち、執着から自由になる。善い人生と真の幸福において真に問題となるものを完全に理解すれば、ひとはいかなる苦の原因にも執着せず完全な解放に達することができる。自然の真理のもとではひとは苦しむことなしに中立的にすべてを理解する。このレベルの幸福は人類がそのために修行すべき、真正の幸福と考えられ、完全な人間の発達にとっての目標であるべきである。この種の幸福を享受するひとびとにとっては、善であり他者の役に立つことを望むのがすべてである。彼らは己を無にして働き他者を助けることにすべてをささげる。

このように物質に基づく第一のレベルよりもさきへ幸福を発展させて進めることが推奨される。ひとびとは至高の幸福という最高レベルには十分に到達できないかもしれないが、精神の発展と、智慧にもとづく幸福により幸福になることができる。

II. 内的幸福：一般的幸福概念との違い

内的幸福は一般的な幸福研究で検討されるような物質にもとづくものよりも高く発展した幸福である。それらの研究は、感情的要因から精神にもとづく幸福に表面的に触れることもあるかもしれない。最近の幸福に関する調査研究はそれらの幸福の対象範囲（おなじようにランクづけされるさまざまな心理学的そして経済的な要因から構成される）のなかに精神的な福祉を含めるかもしれないが、精神的な側面に特別な焦点が当てられることはない（それとは違って仏教は内的幸福により高いランクを与え、苦から解放される方向へと導く）。今日の幸福の経済学は社会的な比較や適応や志望の諸理論から持続不可能な幸福について説明するが、この問題からどうすれば脱出できるのかについて示唆を与えない。

仏教における幸福概念と、一般理論における幸福概念との違いは図1によって図示できる。仏教における幸福は内的幸福とともに自身を上昇させ発展させるよう人々を奨励することによって最高レベルの、苦しみからの完全な解放を目的とするが、一般理論における幸福はなおもたくさんの苦にかかわる第一のもっとも低いレベルに執着する。

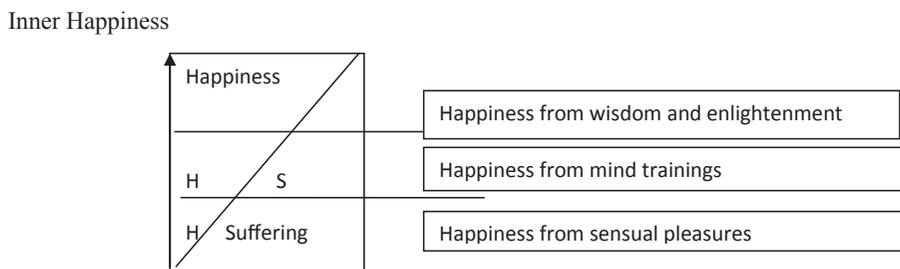


図1. 異なる幸福レベルごとの幸福と苦しみの程度

最底部のレベルはたくさんの苦にかかわる感覚的喜びからくる幸福であり、真の幸福を多く生み出すことはできない。真ん中のレベルは精神に基づくレベルをあらわし、それは自身によって生み出される、もっと多くの幸福にかかわる。内的幸福の増大とは反対に苦しみは少なくなる。だからひとびとは、より高いレベルの幸福を求めるべきなのである。内的幸福が至高の叡智のレベルにまで上昇できるときには、苦の余地はどこにも残されていないだろう。

実証的心理学のような西洋の幸福研究もまた精神レベルからの内的幸福について考えている（しかし自然の真理を理解する智慧のレベルまでカバーしていない）。実証的心理学者は実証的思考と、個人の幸福に影響を与える精神状態を信奉しているが、その精神状態もまた訓練を必要とする。瞑想の実行もまた西洋世界では知れ渡っている。

今までのところ、幸福の経済学はジェレミー・ベンサム（1789）の最大多数の最大幸福という幸福概念を適用して研究や測定の道具を適用してきた。そしてそのほとんどは感覚的な喜び

に幸福を関連させている。心理学者や経済学者は生活満足に関する質問をもちいて幸福や主観的福祉を測定してきた。かれらの幸福の問題領域は物質的レベルと精神的レベルの両方における幸福の決定要因を含むかもしれないが、しかしそれらは幸福の合計値や生活満足得点などにおいて等しい価値（あるいは同じ重みづけ）を与えられる。言い換えると、幸福は同じレベル／次元からのさまざまな影響の組み合わせとして見られてきたのだ。対照的に、仏教における幸福は異なるレベルにランクづけされる。概念の違いは図2によって図示できる。



図2 西洋的概念における同ランクのさまざまな幸福領域と、仏教における異なる段階や種類の幸福との比較

最近の幸福研究のほとんどが、物質／収入、健康、家族関係や社会的関係、精神や精神性等々といった、同じレベルで重要性が等しいさまざまな領域から影響される幸福について説明する。一方、仏教の幸福の概念はより高い形態とより低い形態の幸福を区別し、ひとびとが低いレベルの幸福から、もっと重要なより高いレベルの幸福へ動くことを奨励する。しかし、仏教におけるこの奨励はすべてのひとびとがこれを受け入れ実践するよう強制するわけではない。それは個人が違えば、人間的発展のレベルも異なることを受容する。しかし、ひとりひとり自分の最善を尽くすべきである。

Ⅲ. 発展と生活の質への内的幸福の含意

一般的な幸福概念とは違って、内的幸福は発展への含意がさまざまである。内的に創造された内的幸福は人間精神のより高い発展や、ひとりひとりの内側にある智慧から得られる。人間の、より高い精神的な発展は、自己利益のために他者や自然を搾取したり害を与える欲望を減らすことによって達成できる。ひとは、善や他者への親切や、他者が幸福になるのを助けることによって幸福になることができる。したがって、自分たちのために物質を利用したりため込むのではなく、それらを他者と分け合い、社会の貧しい人々に分け与えることで幸福になるのである。ほんとうの消費は役に立つことを目的として、ほんとうの生活の質のためである。真の必要と不必要な欲求とのあいだの区別をあきらかにすることによって、自然の資源はもっと

真の必要のために使われるだろう。人々の内的幸福とともに、自然資源はまた不要な需要から救われることができる。真の生活の質は、不要な需要ではなく基本的必要（それは時と場所によって異なり得る）に合う。真の生活の質によって幸福が最大になるところが最適なのである。

経済学の主流とは異なる鍵となる含意は、ひとびとはより少ない消費と獲得によって真の生活の質を得て幸福になれるということである。このように、人は幸福を増大させるためには必要ない自然資源の大量使用へと導く過剰な蓄積や、過剰な集積や消費をする必要はない。自分のための需要を少なく、そして物質にたよらないほど、より高度の内的幸福により、より多くの公平な資源分配だけでなく、資源をより少なく利用し、より多くの社会的な幸福や平和な社会へと到達できる。個人と社会の幸福は少ない費用によって到達可能である。

このように、内的幸福（より少ない需要をもつ）の増進によって実際の必要に対して能率的な消費が行われるようになり、効率的な資源が有用性や、有用性のために用いられる能率的な仕事や時間、そして不利な立場にある人々への資源の配分の増大の目的のためにのみ使用される。内的な幸福によって、資源は貧しいひとびともっと配分されるだろう。その結果いっそう公平な分配が増大し、ひとびとは自分たちの人間的発展を進めることのできる基本的必要をもっと等しく受けるだろう（その結果貧困と不平等が減少する）。この概念は苦しみをやわらげる包括的な発展だけでなく、貧困向け、そして公平志向的でもあるのだ。

それゆえ、この概念における真の生活の質は個人と社会の有用性の目的に関連する。仏教概念における生活の質は、過度に快適で豪華で資源の使い過ぎと社会にとっての不十分な資源活用へと導くようなライフスタイルのためのより高度な消費を含意しない。仏教における生活の質の意味は最近の西洋の概念における（たいていは物質レベルの）幸福に関連づけた一般的な生活の質概念とかなり違っている。

要するに、不要な需要（さらに上のレベルの幸福から結果する）を制限する過程は、経済学の主流において、そして（経済学における効用関数のように）高度の消費が高度の福祉を含意すると信じられている発展概念において見過ごされている。対照的に、より少ない消費と資源の有効化をとまなうこの概念における内的幸福は、もっと高度な（主観的）福祉に導くことができる。理論やアプローチのほとんどはこの幸福の問題を取り入れてこなかった。とくに持続可能な発展の概念はなおも供給側の資源管理に依存しており、過剰な資源利用の根本的な原因にとりくんでいない。

IV. 仏教にもとづく幸福概念

最近の西洋世界に出現した仏教に関連した発展概念は、たとえば、足るを知る経済哲学（SEP）と国民総幸福（GNH）がある。本稿もまた、智慧と全体的持続的な発展へと至る経路としての内的幸福に焦点をあてる、新しい仏教的持続的発展（BSD）を提案するものである。これらの

発展概念は、持続可能な発展の物質的側面をこえるところに関心がある。

足るを知る経済哲学 (SEP)

タイ国のBhumipol Adulyadej国王によってはじめられた「足るを知る」の経済哲学は、仏教概念の実践的モデルとみることができる。それは仏教の自己依存と満足と中庸と中道の原理に基づき、仏教的経済学と一致する。この概念における「足るを知る」という言葉は、状況に満足していることだけではなく、何かについて、あるいは何かのために十分に生きることを意味する（つまり人々は必要に中庸なレベルで充足し、貪欲ではなく、より正直であり、それゆえ他者との間でトラブルをおこさなくなる）。

「足るを知る」経済は、あらゆるレベルのひとびとによる適切な振る舞いの最優先原理として中道を強調する哲学を意味する。「足るを知る」とは中庸を意味し、すべてのふるまいの様式における適切な配慮を意味する。それはまたすべてのセクターと集団に正直と清廉の原理に従うよう道徳性を強化することを必要とし、グローバリゼーションによって引き出される社会経済的、環境的そして文化的変動からの批判的な挑戦に適切に立ちむかうための忍耐と勤勉と智恵と思慮深さを結合したバランスのとれたアプローチとして働く³⁾。

それゆえ、「足るを知る」の経済哲学は経済学を超えるが、正当な生活についての仏教の中核概念を共有する。「足るを知る」経済原理は図3に示したような、2条件のもとでの3要素の概念に依存する。

Principles & Conditions of the Sufficiency Economy

Three principles

- Moderation "Satisfaction"
- Reasonableness
"Being aware"
- Self-immunity
"Down-sizing risk"

Two conditions

- ⊗ Knowledge
- ⊗ Ethics



図3. 足るを知る経済の諸原理と諸条件

3) Summarized from Philosophy of the page in *The King's Sufficiency Economy and the Analyses of "Meanings by Economist"*, The Office of the National Research Council of Thailand, 2003.

国民総幸福 (GNH)

ブータンの国民総幸福 Gross National Happiness あるいは GNH は幸福の中核的価値を 4 つの主要な次元との関係として位置づける。それは持続可能で公平な社会経済、善い統治、文化の振興と維持、そして環境保護である。経済成長戦略を個人や社会の幸福の追求においては誤った方向と見て、GNH は発展について新しいパラダイムをもたらした。ブータンは国連やグローバルな発展のコミュニティに、新しい発展のパラダイムとして、幸福の増進を提案した⁴⁾。

新しい発展のパラダイム (NDP) において真正の幸福は自然との調和や、共感や、満足の深い感覚から生じる。それはまた社会や環境からの基礎的な必要 (つまりきれいな空気や水、良好な健康や適正な生活条件、知識、平和、安全と正義、意味のある関係等々) を人類が真実の幸福を育てて到達するための前提条件として認める。それはまた地球上のすべての生命 (つまり人間と他のさまざまな種) の持続可能性と相互依存に価値をおく。すべての次元におけるグローバルな危機を迎えて、それは発展について全体的な見方の必要を説く。新しいパラダイムは作成中のポスト 2015 開発議定書に影響を与えるものと期待される。

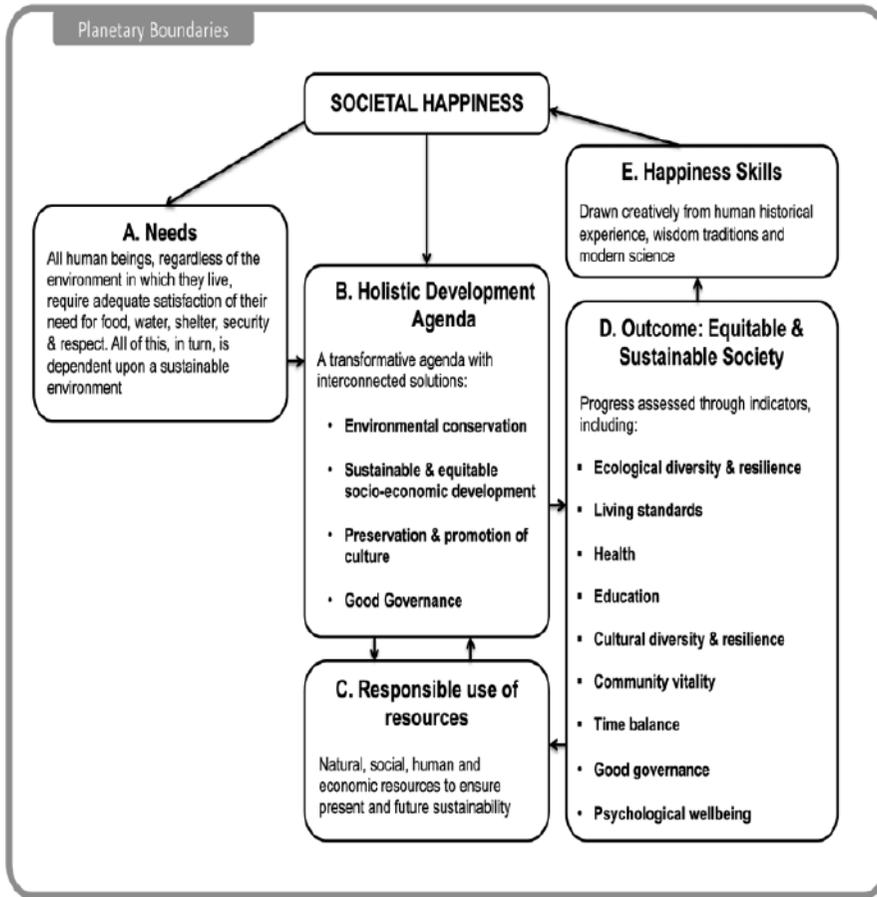
NDP モデルにおいては社会的幸福の展望からは地球上の限界の範囲内での人類の進歩を考えるので、真の必要に焦点をおき、少数だけの「欲しいもの」よりも全ての人類の必要を満たすことが必要になる。NDP はまた、人間のそして社会の幸福を経験するためには幸福のスキルが必要な個人的道具だと認識する。NDP の枠組は図 4 のように図示できる。

この概念のもとでは、福祉の条件と測定はブータンの GNH 指標で近年用いられている 9 つの領域、つまり生態学的多様性とレジエンス、生活標準、健康、教育、文化的な多様性とレジエンス、コミュニティの活力、時間バランス、良い統治、そして心理学的福祉という領域にしたがって評価することができる。これらは、環境保護、持続可能あるいは公平な社会経済的發展、文化の維持と増進、そしてよい統治という GNH の主要な 4 つの構成要素のもとにある。

要約すると、「足るを知る」経済と GNH の仏教に関連した諸概念は福祉の非成長的な次元と自然との関係を認識し、発展について全体的な展望を与えている。それらはまた経済成長モデルの物質主義や消費主義よりは、中庸と満足をもったバランスのよいライフスタイルを増進させる。明らかに、2 つのモデルは成長を重視せず、独自の道筋に価値をおき、それが主流を追いかけるよりももっと彼らの社会にとって幸福な発展に導くことができる。

上述の既存の概念に加えて、本稿で導入するもうひとつの別の仏教的アプローチ (いわば「仏教的持続可能な発展」 Buddhist Sustainable Development—BSD) は持続可能性の目標に到達するための経路あるいは方向を示すだけでなく、持続可能な発展を能率的な目標とするための鍵となる要員として内的幸福に焦点をあてる。人間の内側で生成できて外的要因とは無関係に生まれうる内的幸福は幸福の物質的レベルを超えている。

4) NDP (2013)



Source : NDP (2013 : p.VIII).

図 4. 新しい発展パラダイム New Development Paradigm (NDP) の枠組み

V. 持続可能な発展の枠組を考え直す必要性

2015 年はグローバルな開発コミュニティが 2030 年までに達成すべき持続可能な発展目標 (SDGs) にとって転換期といえる。まさに仏教的幸福概念の新しい考え方や、それが持続的発展にとってもつ含意について討論するのは時宜を得ている。広く用いられている持続可能な成長についてのグローバルな定義 (Brundtland report⁵⁾ による) は

「未来の世代が彼ら自身の必要に応じられる能力を危険にさらすことなしに、現在の必要に応じる発展」

というものであり、現在と未来の世代の必要に合うことだけを考えていて、人類の無限の欲望について正当な考慮を払っていない。

5) World Commission on Environment and Development's *Our Common Future* (1987) より。

この枠組は世代間にわたる福祉の概念と、どのようにすれば目標に到達できるかについて曖昧である。この持続可能な発展の枠組は物質的福祉だけに関連しているようにみえるし、現世代に未来の必要について関心をはらうよう求めているようにみえる。問題は、もしも現世代のひとびとがなおも貪欲で自分たちのための低レベルの幸福に執着するのであれば、このことが可能となるのかどうかということである。この概念は「どのようにすれば」という道筋を欠いており、かれら自身の幸福と（無限の需要を満たすこととの）「トレードオフ」の状態にあるようにみえる。そうすることが、ひとびとにとっては物質的消費／蓄積への執着のために幸福ではないように感じられないだろうから、この要求は可能でも持続できるものでもない。この概念は、持続可能な発展にとって主な生涯となる人間の貪欲さやわがままの根源の原因を無視しているようにみえる。このために、ここで提案する仏教的な持続的成長（BSD）は幸福の問題に焦点をあてて分析し、内的幸福をもって、根源の原因を除去する方向をもたさなければならぬ。ここで提案する発展の枠組は真の生活の質のための真の消費をともなう真の必要の限界を明確にし、真の人間福祉あるいは幸福とのトレードオフとは無縁である。そしてまた、現世代が未来の世代の幸福とのあいだのトレードオフに陥ることもない。なぜならば、現世代は限定された真の必要をもち、より高い形の幸福をもつので現時点で幸福になることが可能だからだ。

この概念をすすめることにより不必要な物質的使用や、無限の欲求をもつ人類の過度に搾取的な行動に限界を設けることができるだろう。同時に、この概念は中庸に生きることによりひとびとが幸福になり得ること（そして幸福を増していくことさえも）を信じる。ひとびとは中庸な消費と資源利用によって高いレベルの幸福を得ることができる。

よく修養された精神なしには、人間の欲望は終わりがなくどんどん多くの消費へと導かれ、エネルギーと資源の過度の利用へと至る。このタイプの行動は地球上で利用できる有限な自然資源と必ず矛盾するだけでなく、人類間の紛争をもたらすだろう。世界は、消費主導の成長経済において時間や物質主義に関して加速される消費とともに持続可能な道をもつことはないだろう。とくに、世界の問題は人口増大や都会化、そして物質主義的な社会をさらに増大させる産業化によって加速されている。

問題は国レベルとグローバルなレベルの両方で生じている。より物質主義的でより発展した国々はそれら自体の資源の利用可能な分以上に資源を利用し、発展していない国々の環境に対して侵略し、不利な衝撃を与えている。発展した経済ほど、高度に資源を利用してきた。たとえばアメリカはそれだけで世界の人口の約5%を有しているだけだが、世界の資源の約40%を、世界のエネルギーの約30%を消費し、グローバルな温暖化全体の約30%の原因となっている。躍進しつつある経済やあるいは大国や大きな地域、つまり中国やブラジルやインド、あるいはASEAN等々がもっと都市化され、産業化され、物質主義化したときには、これらの増加する消費と投資に応じるために、さらにたくさんの資源が必要となると予想できる。

それゆえ、この惑星の資源が有限だとすれば、無限の欲求によって（おそらく「いつわりの需要」と言うことができるだろう）休みなく消費し続けるよう人々を刺激する社会経済システムは持続可能な発展と両立できそうもないし、このために、消費主導の発展モデルの最近の発展のパラダイムは発展が能率的に持続できないという世界的な問題を解決できないのである。

この新しい発展の概念は、真の人間開発を向上させるための消費に使われる製品／材料の真の価値を理解するように人々を奨励する。これによって不必要な利用や人間行動による資源の過度な搾取を制限できる。人間は生存するために基礎的な物質的必要なしに生きることはできないが、贅沢な過度の物質なしに幸福に生きることは可能である。精神の内的幸福とともに、標準的な生活の質（真の必要）に近づく程度まで限定された欲望は、圧倒的な利用や贅沢な消費や不必要な生産を減少させ、生活にとって真に良いもの（真の、あるいは能率的な消費）を消費するよう気付かせることだろう。人間は不必要な欲求を低下させ生産を減少させ、邪魔になる自然資源を少なくさせ、人生におけるもっと有意義なことに使う時間を増やすだろう。言い換えるならば、消費を最小化し資源利用を最も少なくすることによって人間の福祉を最大化できるのだ。

生活の中庸の道をとれば、消費と生産は適切になり、資源の利用を最小化を最も能率的な方法によって達成できるようになる。社会の発展のために使うエネルギーと資源をいっそう節約できるようになる。自然への愛と配慮と感謝によって人類と自然との軋轢は少なくなるだろう。経済的な福祉と自然はもはやトレードオフの関係ではなくなるだろう。この種の幸福が発展への持続可能な道に通じるのだ。

VI. 仏教的な持続可能な発展（BSD）の新しい概念

この種の内的幸福に焦点を置く人間開発が、発展を有効にするうえで本質的なものだ。持続可能な発展についての伝統的な考えが長い間用いられてきたにもかかわらず環境と持続可能な発展の問題を効果的に解決できていない現状をみると、発展についての心構えをあらためて、真の道筋と見方をもつ枠組みを考え直すべきときではないだろうか。その枠組みは有効な持続可能な発展に向かう新しい方向を形作ることができるものであるべきだ。持続可能な発展を進める鍵として内的幸福を位置づけることで決定歴な変化が可能になる。

持続可能な発展の枠組みの主流は環境や資源管理や供給の側に焦点を置くが、このアプローチは人間の行動あるいは持続可能な発展の需要の側である消費の管理に焦点を置く。

内的幸福に焦点をあてるこの新しいアプローチは、人類が中庸の消費や協力や思いやり、そして自然との調和によって幸福に生きられるということを示唆する。この種の発展は個人の主観的な福祉を増進し、それが広がっていった社会の幸福や持続可能性につながる可能性がある。

智恵と思慮深さが、新しい方向の発展をすすめるための鍵である。人類は自然の法のもとに

あるすべての存在のあいだの関係について深く理解することで配慮のある持続可能な社会へと精神的に向かう、より高い資質を得るだろう。人間の福祉と人間関係を豊かにする自然への感謝を学ぶことが、親切と協力を愛する文化のもとで必要になる。

この種の発展は内的幸福に焦点をあて、中道の生活と中道の経済を許容する適切なシステムとともに、解脱という最高の目標に向けて精神を純化する道に沿うものである。このシステムにおける人間と社会と環境の関係は自然資源の使用量を少なくできる。これが真の持続可能な発展に向かう道である。

世代のあいだの必要のあいだの妥協だけを強調する、持続可能な発展についての既存の枠組みは、個人がそれぞれの低いレベルの幸福に関心を持つのがふつうである以上、達成困難だろう。ひとびとがもっと高度の、内的な幸福を享受できるほど開発されなければ、かれらは他者や未来の世代に配慮しようとはしないだろう。

それゆえ持続可能な発展についての新しいアプローチは幸福の問題に焦点をあて、効果的で持続可能な発展を結果するより高いレベルの幸福への道を強調しなければならないのである。本稿で提案した新しい持続可能な発展のアプローチは真の生活の質のための真の必要と真の消費への制約を促進するが、それは真の人間福祉や幸福とトレードオフにはならない。中庸で効率的な消費をすれば、ひとびとはより高いかたちの幸福にいたることができる。

BSDの枠組みのもとでは、人間の行動は従来の経済理論が前提にしていたような私利と無限の欲求によってではなく、知恵によって動かされる。このような人間の精神への注目は、持続可能な発展についての主流である概念では無視されてきたし、主流概念が現在のグローバルな諸問題を有効に解決できない原因はここにあるのだろう。それゆえに、(内的な自由／幸福をともなった) 人生の目標に向けて正しく見定めることが他者と自然に対する正しい行動の確固とした基礎となり、持続可能な発展への道へと導くだろう。

本稿ではすべてのそして持続可能な発展の基礎となる持続可能な幸福人間の精神的成長のための全体的アプローチを示唆した。そして、従来主流となっている持続可能な発展の概念を構成する経済的、社会的、環境的要素に付け加えられるべき鍵となる要素が、内的幸福による人間開発なのである。

【本稿は、2015年5月22日関西大学千里山キャンパスにて開催された、平成27年度関西大学3研究所（東西学術研究所、経済・政治研究所、法学研究所）合同シンポジウムにおける Sauwalak Kittiprapas 博士の講演原稿（英文）をもとに高瀬の責任において和訳したものである。】

References

- Adams, W. M. Green Development: Environment and Sustainability in the third World, Routledge, London, 1990.
- Bentham, J. (1789). Introduction to the Principles of Morals and Legislation. London
- Chiangkul, W. New Economics. Krungthep Turakit, Bangkok, 2013
- Kittiprapas, S. "Measuring happiness for driving development" in Happiness and Human Transformation (in Thai) from the 3rd annual conference of Contemplative Education Center of Mahidol University, Bangkok, 2010.
- NDP Steering Committee and Secretariat. Happiness: Towards a New Development Paradigm. Report of the Kingdom of Bhutan. 2013
- Payutto, P.A. (Phra Brahmaganabhorn) A brief Introduction to the Buddha-Dhamma, 2011
- Payutto, P.A. (Phra Brahmaganabhorn) Buddha Dhamma -Extended Edition, 2012.
- Payutto, P.A. Buddhist Economics, printed by Buddhist University Press, second edition, 1992.
- Payutto, P.A. Peace through Freedom and Happiness. Wat Yannawejsakawan (fourth reprinted), Bangkok, 2013.
- Payutto, P.A. (Phra Dhammapidok) Sustainable Development (in Thai). Komon Keemthong Foundation, Bangkok, 2006
- Puntasen, A. Buddhist Economics (in Thai), Ammarin Printing, Bangkok, 2001.
- Puntasen, A. Buddhist Economics: Evolution, Theories and Its Application to Various Economic Subjects (A translation from selected chapters in Thai book), Bangkok, 2008.
- Shumarker, E.F . Small is Beautiful: Economics as if People Mattered, Chapter 4. Buddhist Economics. Harper & Row Publisher. 1975.
- Sustainable Society Foundation. A Sustainable Human Development Index in the Post 2015 era, March 26, 2013. <http://www.ssfindex.com/a-sustainable-human-development-index-in-the-post-2015-era/>
- Thinley, Y. J. "The Philosophy of Gross National Happiness (GNH)" in WFB Review, Bangkok, October 2005-March 2006.
- The World Bank. *World Development Report 2003: Sustainable Development in a Dynamic World*, Washington D.C., 2003.
- The World Commission on Environment and Development (the Brundtland Commission). *Our Common Future*. Oxford: Oxford University Press, 1987.
- Wibulswasdi, C. et. al., *Sufficiency Economy Philosophy and Development*. The Crown Property Bureau, Bangkok, 2011.

Websites

- www.happysociety.org International Research Associates for Happy Societies (IRAH)
- <http://www.bhutanstudies.org.bt/> Center of Bhutan Studies (CBS).